

令和4年度

試験名:後期試験(論述)

【 人間学群 教育学類 】

区 分	標準的な解答例又は出題意図
出題の意図	<p>問題</p> <p>【問1】 筑波大学人間学群教育学類で何を学びたいか。教育学類の特徴をふまえつつ、200字以内で答えなさい。</p> <p>【問2】 以下の文章を読み、下の問に対して解答しなさい。</p> <div data-bbox="416 683 1436 1422" style="background-color: #cccccc; height: 330px; margin: 10px 0;"></div> <p>註1 Yann Algan, Pierre Cahuc and Andrei Shleifer (2013) “Teaching Practices and Social Capital,” <i>American Economic Journal: Applied Economics</i>, 5 (3), 189-210.</p> <p>註2 Takahiro Ito, Kohei Kubota and Fumio Ohtake (2015) “The Hidden Curriculum and Social Preferences,” mimeo. ISER DP, 954.</p> <p>【出典】大竹文雄『競争社会の歩き方- 自分の「強み」を見つけるには- 』中央公論新社、2017年、141-142頁。(一部改変)</p> <p>問</p> <p>「板書中心の国の一つとされている」日本の学校教育に「生徒同士がグループ学習をする」というスタイルを組み込むとすれば、どのようなことに留意しなければならないか。あなたが中学校・高等学校の教師、もしくは教育関係者であると仮定し、かつ、自身の学習経験を盛り込みながら、自らの考えを800字以内で論じなさい。</p>

出題の意図

後期日程の試験は、当初予定の集団面接に代わり、論述形式となっている。

【問 1】は、面接において評価の対象となる、受験生の志望理由を問うものである。大学入学後のアカデミックライフを具体的に描けているかが評価の柱となる。また、本学教育学類に対する関心を有しているかは、教育学類の特徴を明記しているかによって判断される。

【問 2】は、主体性評価の二つの評価観点 <主体性>と<協同性>を兼ね備えているかを、自らの経験をふまえた論述によって判断しようとするものである。

個の学習のみならず、集団での学習が求められてきている昨今の教育状況において、集団での学習を推進するための方策を、教育関係者の立場に立ちながら考えられるかを問っている。学習者ではなく、教育者という視点から教育課題について考えられることは、教育学を学ぶ者としての<主体性>を示している。また、集団での学習を推進する具体的方策を自らの学習経験から引き出せるかは、受験生が<協同性>を備えているかを判断する指標となり得る。

問題中の資料が示すように、集団での学習は利他性や正の互惠性を育む機会となり得るが、それは集団内での学習者の没個性的・受動的な行動・姿勢があっては効果を得ない。共通の目的をもった集団での学習の中で、共通目的の達成のために各人が自らの持っている力を発揮し (<主体性>)、互いに高まり合おうとする意欲・姿勢 (<協同性>) も求められる。解答において、(1) <主体性>と<協同性>の調和に関わる諸要点を論述のなかにどれほど含めているか、また (2) それら諸要素をいかに配置・構成し、論理的にまとめられているか、が問われる。